熊本方言におけるカ語尾

吉里さち子

1．はじめに

熊本方言は、西九州方言の特徴を多く有した方言である。その中の形容詞でも、ヨカ、キレイカなど、共通した方言要素の一つであるカ語尾が使われており、熊本方言らしさを醸し出すものの一つとなっている印象が強い。本稿では、非熊本市内方言話者が効率よく熊本方言について知り、学習するための教材を作成する上で、熊本方言の形容詞について何をどこまで提示すればよいかについて、考察を深めるため、発話資料をもとに分析を行った。本稿で扱うのは、熊本方言学習教材の使用者として想定している熊本市内の大学等に通う留学生が、最も触れる機会が多いと思われる熊本方言の中でも特に熊本市内の大学生（本稿では熊本市内青年層とする）の中で使われる熊本方言である。

2．カ語尾について

2-1.カ語尾の勢力範囲

カ語尾とは、形容詞、形容動詞の語尾が「―か」に変化する現象を言う。例えば、ヨイ（良い）がヨカとなる現象である。「良カ映画ノキタバッテン、見ル暇ノ無カ」のように、形容詞の連体形・終止形に現れる（松田（1969））。住田（1985）では「九州の西半一体」、松田（1969）では「北は遠賀川の河口から、南は志布志湾へ向け九州を縦割りした西部一帯がカ語尾地区」とあるように、主に福岡、長崎、佐賀、熊本などで使われていている。この特徴は、2006 年 3 月に完結した国立国語研究所の「方言文法全国地図」から同年 12 月に掲載された月刊『言語』p. 44 第 137 図「高くない」でもタコーナカ、あるいはタコナカとなり、西九州一帯に分布していることから、現在でも西九州方言の典型的な特徴の一つだということができる。

2-2.カ語尾の勢力段階

住田（1985）によると、カ語尾使用にも段階があり、カ語尾使用の傾向が強い地域は形容動詞、形容詞ともにカ語尾化して用いられる。その次の段階として、形容詞のみがカ語尾化して使用され、カ語尾使用の傾向が弱まる地域ではヨイ・ナイの二語のみがカ語尾化して使用され、カ語尾使用の最終段階として、ヨイのみがカ語尾化して使用される傾向にあるという。このことを表にすると次ページの表 1 のようになる。また、松田（1969）では、ヨイの連体形のみがヨカ家、ヨカ人のようにカ語尾化して使われる地域もあることが指摘されているが、本稿では、カ語尾使用の実態を広く把握するため、終止形、連体形に関わらず、住田（1985）の指摘するヨカのみの使用という段階でそれ以上の細分化はしないという立場をとる。

表１：カ語尾の勢力段階

	例	強 ←			→ 弱
形容動詞	元気カ	○	×	×	×
形容詞	暑カ	○	○	×	×
無い	ナカ	○	○	○	×
良い	ヨカ	○	○	○	○

3. 熊本市内青年層におけるカ語尾使用の実態

3-1.資料について

資料として扱ったのは、馬場（2005）及び田川（2007）で採集された発話資料である。どちらも、主に熊本市内で出生し学齢期を過ごした大学生で、いわゆる生え抜きの方言話者を対象としている。カ語尾使用の実態を分析するにあたり、発話資料を参考にしたのは、非熊本方言話者が熊本方言話者とのコミュニケーション・ツールとして熊本方言を効率よく学習するには、まず使われる頻度の高い語彙、表現が優先されるべきだと考えているからである。従来方言調査などでよく使われているアンケート形式などでは、「（対象とする語彙、表現の意味が）分かる」あるいは「（対象とする語彙、表現を）使うこともある」という判断が優先されるので、その方言の全体像を明らかにするためには有効であるが、実際の使用頻度の高さを判断するものとしては適していない。

馬場（2005）からは、３つの発話資料*注を使用した。採集した資料での話者は次のようになっている。同じ学科の同級生の女子 4 人の会話（資料 1）、大学生姉妹 2 人の会話（資料２）、2 学年差がある女子 2 人の会話（資料３）である。田川（2007）からは、同学年男子 2 人の会話（資料４）を使用した。各資料の発話時間は 40 分超程度である。

3-2.資料から採集されたカ語尾

（　）内の標準語での言い換えは筆者によるものである。

（1）カ語尾ヨカに標準語の終助詞が続く例

196　B:いや、よか。焼肉はヨカ。何がヨカかね。（資料2）

（いや、いい。焼肉はいい。何がいいかな。）

（2）カ語尾ヨカに熊本方言の終助詞が続く例

A032　あ、どっちだっけ？まあどっちでもヨカばってん。（資料3）

（あ、どっちだっけ？まあどっちでもいいけど。）

（3）カ語尾ヨカに接続詞が続く例

A034　ヨカばってんねー。ヨカけどねー。なんか無意識的に。（資料3）

（いいけどねー。いいけどねー。なんか無意識的に。）

3-3.　資料全体から言えること

4 つの資料のうち、2 つの資料からしかカ語尾の使用が観察されなかった。観察されたカ語尾からは、以下のことが分かった。

3-3-1. 発話参加者の数とカ語尾使用

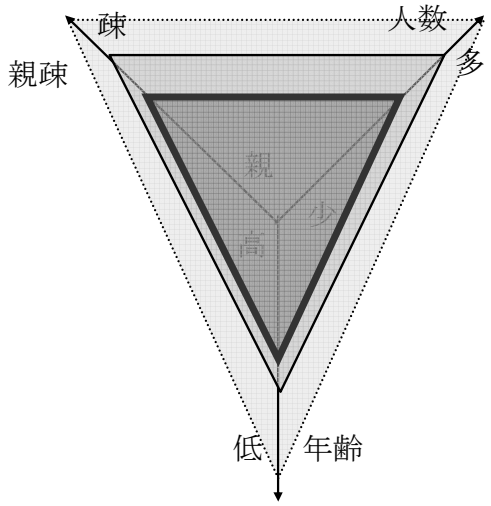
資料１では、全くカ語尾使用が観察できなかったことから、話者が 4 人という多人数になると、より方言要素の使用がより「接続詞、助詞、助動詞など、実質的な意味を持たず、文法機能を担うような要素」（馬場（2005））に限定され、ヨカを含めカ語尾のような「実質的、辞書的な意味を担っている名詞、動詞、形容詞にはあまり方言的な要素」（同じく馬場（2005））は標準語へと切り替えられてしまっていると言える。

3-3-2. 親疎の関係とカ語尾使用

資料２の大学生姉妹の会話では、(1) にあるようにヨカが使用されている。このことは、従来の方言研究の記述に多くあるように、話者同士がより親しい関係にある場合は、方言が使われやすいというのがカ語尾使用の場合にもあてはまることが分かる。

以上の 2 つの点と方言使用の差が現れやすい年齢の要素を加味すると、図１のように表される。関係が親しく、発話に参加する人数が少なく、年齢が高くなると、カ語尾はより多く使われるのではないかということである。つまり、図１の中心に向かうほどカ語尾使用の頻度が高まることが考えられる。

図１：カ語尾の使用と
親疎・人数・年齢の関係



3-3-3. 熊本市内方言話者青年層でのカ語尾の勢力段階

また、2-2.で述べたカ語尾の勢力段階に照らし合わせると、熊本市内方言話者青年層では、ヨイのみのカ語尾化しか観察されず、形容動詞、形容詞、ナイ（無い）のいずれも標準語の語彙が使用されていた。活用形としては終止形のみで、ヨイの連体形ヨカという形で使われた例も観察されていない。このことから、熊本市内方言話者の青年層では、カ語尾の使用実態としては衰退の傾向にあると言える。

4. 非熊本方言話者への提示に向けて

4-1.使用表現としてのカ語尾

３.でも述べたように、熊本市内方言の青年層でのカ語尾使用は、ヨイの終止形ヨカのみにとどまっているため、まず、方言使用を目標とする場合は、このヨカを提示し、ヨカ+標準語の終助詞、接続詞の例、またヨカ＋熊本方言の接続詞（例えば、(2）の「ヨカバッテン」など）を紹介する必要がある。

4-2.理解表現としてのカ語尾

本稿で扱った資料には、ヨカのみしか観察されなかったが、多くの方言資料の記述にもあるように、本来熊本方言でも多くの形容詞がカ語尾化する。話者の年齢が高ければ、アツイ（暑い）→アツカ、キレイ→キレイカ、ナイ（無い）→ナカなどの例が観察されるはずである。熊本方言を学習する非熊本方言話者が同世代のみとコミュニケーションをとるということは考えにくく、アルバイト先などで年長者の熊本方言にも触れる可能性は十分考えられる。そこで、使用までは求めない理解にとどめたカ語尾についても、ぜひ提示しておく必要がある。まずは、形容詞、形容動詞それぞれのカ語尾化した形、ホシイ（欲しい）→ホシカ、～（シ）タイ→～（シ）タカなど形容詞的活用をする表現もカ語尾化して使用される例、また、イイ人→ヨカ人など連体形として名詞に続く形などが挙げられる。

5. まとめ

熊本市内方言全体という観点から考えると、カ語尾のように元気カ、暑カ、ナカ、ヨカなどの表現が存在するが、実際話す場合はほとんど使われなくなっていて衰退の傾向が強い方言要素であるといえる。特にカ語尾に関して言えば、その使用実態をカ語尾使用の一端が明らかになり、カ語尾の使用実態を細分化して観察するには、より親の関係でないと採集するのが難しいということは、本稿の分析から指摘することができる。一方、今回の発話資料からも、明らかに標準語ではなく熊本方言で話していることを裏付ける方言要素も多く存在することが観察された。馬場（2005）で指摘されているように「実質的、辞書的な意味を担っている名詞、動詞、形容詞にはあまり方言的な要素が現れ」ず、また、「接続詞、助詞、助動詞など、実質的な意味を持たず、文法機能を担うような要素が方言的要素となり、熊本の言葉らしさの形成に寄与している」と言える。では、なぜ「文法機能を担うような要素が方言的要素」が標準語との交替が起きにくいのかを解明していくことも、非熊本方言話者の熊本方言を学習する上で、効率よく熊本方言らしさを獲得するためには重要である。また、上下や親疎関係によって、使われる方言要素の種類や頻度も大きく異なることが予想される。これも、非熊本方言話者の学習効率を上げるため、また、場面、相手による誤用を避けるため、明らかにされなければならない。これには、使用実態を分析するための発話資料が数多く必要となる。現代熊本方言の実態を正確に捉えるためにも、是非とも必要なものである。今後の課題としたい。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(B)(一般)）平成18年度～平成 20 年度「地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発構築と実際」(代表:馬場良二)の研究成果の一部である。

参考文献

加藤和夫（2006）「特集・地図に見る方言文法　方言文法全国地図第 137 図　高くない」『言語』（vol.35・No.12）12 月号 p.44-47　大修館書店

金田章宏（2005）「特殊な方言文法―なにをもって「特殊」というのか―（特集　方言の文法）」『日本語学』（Vol.24, No.14）p.44-54 明治書院

神部宏泰（1980）「九州西部方言の形容詞―カ語尾形容詞を中心に―」『国語教育研究』26 号広島大学教育学部光葉会

工藤真由美（1998）「「西日本諸方言」と一般アスペクト論」『言語』vol.27・No.7　大修館書店

坂田佳江（2004）「肥筑方言におけるサ詠嘆法」『語文研究』Vol.97　pp. 17-29　九州大学国語国文学会

住田幾子（1985）「九州方言における「カリ活用」の現況」『日本列島方言叢書２３　九州方言考①（九州一般）』（『日本文学研究』21 号）p.266-275

丹羽一彌（2005）「方言資料と日本語文法（特集　方言の文法）」『日本語学』（Vol.24, No.14）p.14-22 明治書院

馬場良二（2005）「熊本市内方言話者の発話分析」熊本県立大学文学部紀要

松田正義（1969）「九州方言概論」『日本列島方言叢書２３　九州方言考①（九州一般）』（『言語生活』216 号）p.17-25

村上智美（2004）「形容詞に接続するヨル形式について―熊本県下益城郡松橋町の場合―」工藤真由美(編)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房

八亀裕美（2005）「標準語の文法と方言の文法（特集　方言の文法）」『日本語学』（Vol.24, No.14）p.6-12 明治書院

*注　資料について

資料採集の環境等については、それぞれ田川恭識「熊本方言談話音声の分析；方法と計画についての試案」（2007）近畿音声言語研究会月例会資料、馬場良二「熊本市内方言話者の発話分析」（2005）熊本県立大学文学部紀要を参照されたい。